

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

増 永 悦 子

論 文 題 目

ピアサポートグループに参加する乳がんサバイバーの語りの分析
－看護師の教育課題の展望のために－

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教 授 大谷 尚

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教 授 服部 美奈

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 准教授 河野明日香

論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、ピアサポートグループに参加する乳がんサバイバーの語りの分析を通して、それに関わる看護師の教育課題を検討することである。

なお、本論文の副題は、当初「乳がんサバイバーのピアサポートグループに関わる看護師の教育課題の確立のために」であった。しかし「主題と併記すると冗長になる部分がある」との指導により「看護師の教育課題の展望のために」に変更された。以下に各章の概要を示す。

序章では、わが国のがん統計の動向を提示し、本研究対象の成人女性の乳がん罹患数や死亡数が第1位であることを示している。また、乳がんを含め、がん体験は大きなストレスであり、多くのがんサバイバーは鬱、不安、コントロールの喪失や社会的孤立等の、心理・社会的困難を経験することを文献を用いて示している。以上より乳がん体験は身体的だけでなく、心理・社会的問題を生じさせることを確認している。この改善のための方法の一つとしてピアサポートがあり、その意義は「治療選択の決定への影響」「異なる感情の承認の促進」「社会的孤立とスティグマの減少」等であることを、先行研究から確認している。このような乳がんサバイバーのピアサポートの意義は既知であるが、その名称や定義は十分整理されず、混乱した使用状況にあるため、術語の共有を目的に、国内・国外文献を用いて諸概念を整理している。

第1章では、日本人成人女性の乳がんサバイバーのピアサポート研究のシステマティックレビュー（系統的文献レビュー）を実施している。その結果、4つの特徴、「1. 研究方法の違いによる特徴」「2. ピアサポートの検討のために引用された概念・理論と、その研究的背景の特徴」「3. がんサバイバーシップの季節で分類した特徴」「4. 既存の援助特性との相違と類似における特徴」を見出している。これらのうち2では、これまで主に社会学・心理学の概念や理論に基づいて研究がなされていることを確認している。その結果として本研究では、そのような立場から脱却し、「語る」ことそれ自体の重要性を尊重する立場をとり、乳がんサバイバーの語りの分析を行うことを示している。

第2章では、乳がんサバイバーが語る「物語」自体の意義を、諸文献を用いて論じている。そして研究方法としてのナラティブアプローチを概観して整理し、医療保健領域におけるナラティブとナラティブアプローチの機能と意味を整理した上で、本研究でのナラティブとナラティブアプローチの定義を示し、その意義を論じている。

第3章では、著者が実施したインタビュー研究の知見に基づいて、本研究の対象となる乳がんサバイバーのピアサポートグループの意義と課題を論じている。これらは医療施設内においてその施設の医療者との関わりをもつA・B患者会である。A患者会参加者のインタビューの分析結果からは、『地域基盤性』『病院基盤性』『医療者関与性』の3つの特性を抽出している。そしてA・B患者会のリーダーのインタビューの分析結果からは、『患者会への思い』『同病者への支援』『患者会リーダーのあり方』の3つのテーマを抽出している。これらを通して、同病者のがん再発や死に関わる機会があるリーダーの課題と、リーダーを支援する看護師の教育課題の、一層の解明が必要であることを示している。

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

第4章では、著者が実施したインタビュー研究の知見に基づいて、乳がんサバイバーのピアサポートグループの参加者の課題を論述している。個々の乳がんサバイバーの課題については、がん患者家族・遺族の体験をもつ乳がんサバイバーに焦点を当て、その課題を論じている。ここでは、『医師に関する語り』『看護師に関する語り』が見いだされ、密接に関連した医療としての『緩和ケアに関する語り』を加えた3つの語りと、これらに共通に抽出された【見守られ感】【見捨てられ感】というテーマを見出している。研究結果から、終末期患者と家族へのコミュニケーションスキルの向上を目指した看護教育が必要であることを論じている。そして、がん患者家族・遺族の体験をもつ乳がんサバイバーの語りの分析結果からは【見守られ感】【見捨てられ感】の重なりに加えて、がん患者家族・遺族と乳がんサバイバーの両方を経験している者が、同じ境遇の者が周囲にも患者会にもいないことによる孤独感の中にいることを見いだししている。これらのことから、そもそも家族を喪失する年代にも関わらず、それが周知されない状況が確認され、さらに、がん患者家族もがんサバイバーになる可能性をもつこととその困難な状況を、看護教育で扱う必要があることを論じている。なお、がん患者とがん患者遺族の体験を同時にもつある乳がんサバイバーは、ピアサポートグループでの「病気について十分に浸る体験」と、今回のインタビューでの「体験を語る体験」を通して、少なからぬ肯定的自己変容を経験したことが確認された。このことから、今後の看護教育の課題として、傾聴を含めたコミュニケーション能力の向上のための教育内容・方法の検討が必要であることを述べている。

第5章では、乳がんサバイバーのピアサポートグループに関わる看護師の教育の中でも、看護基礎教育に焦点化して教育課題を論述している。看護基礎教育では看護専門職の能力 - 看護実践能力が必要とされており、それについて文献を用いて論じている。また看護実践能力の獲得過程の例として、著者自身らによる研究知見を提示している。その結果、教師主導の一斉授業での講義・演習では知識・技術の習得は可能だが、それを超える論理的思考力を発展・向上させるには、教育方法の改善が必要であることを論じている。また著者らは批判的思考態度にも着目して文献研究を行っているが、その結果、わが国の看護学生の批判的思考態度を捉える際の共通要素の存在や、看護学生が共通にもつ7つの要素を確認している。さらに、批判的思考態度への効果が確認された学習方法は「グループ学習」「ディベートを用いた学習」であることを示している。そして、第3章と第4章で論じた研究結果から得た看護師の教育課題を整理した結果、「1. 知識に関する課題」「2. 技術・態度に関する課題」を見出している。

終章では、本論文の研究成果を章ごとに整理して提示している。最後に、本論文の研究成果を用いた今後の看護基礎教育についての展望を論じ、まとめとしている。

本論文の独自性と学問的貢献として特筆すべきは次の諸点である。

論文審査の結果の要旨

- ① 乳がんのみでなく多様ながん患者にとって重要性が理解されるようになっているにも関わらず、現在ではまだ十分に明らかになっていないがん患者のピアサポートの機能と意義の解明を、乳がんサバイバーのナラティブの採取とその分析を通して行うという、きわめてレリバンシーの高い研究課題を設定し、それを達成していること。
- ② 包括的で体系的な情報の欠如している乳がんサバイバーのピアサポートグループについて、国内外の先行研究の知見を幅広く収集して整理し、さらにシステムティック・レビュー（系統的文献レビュー）も実施することで、それらを客観的に分析している点に新規性があること。
- ③ がん患者遺族や乳がん患者である研究参加者からの否定的体験を含む聴き取りという困難なデータ採取を、研究者の専門的背景（看護師として名古屋大学医学部附属病院外来化学療法室勤務の経験を有し、がん患者サポートの知見を有していることと、乳がんサバイバーの理解に必要な内分泌や乳房再建等の知識を有していること）、現在の教育的立場（看護学部教員であり、患者の立場に立った看護教育の改善に使命感を有しており、それが研究参加者に理解されることで、研究参加者からの看護師教育改善への期待を受けたこと）、個人的・家族的背景（自身が乳がん患者の親族を持つだけでなく、別の親族をがんで亡くしており、介護の経験も有するため、研究参加者との間で経験や感情を共有し得ること）を基盤として、非常に質の高いデータの採取を達成していること。
- ④ 採取したデータに質的データ分析手法 SCAT を用いた緻密で深い解釈的分析を施していること。その際とくに、先行研究から得た概念的・理論的枠組みを積極的に適用することで、恣意的な解釈になることを避け、分析の妥当性と客観性を確保していること。
- ⑤ 上記の結果を看護師の教育に活かすための種々の検討を行い、看護教育者の再教育を含む今後の看護教育の改善に資する知見を呈示していること。

本論文に対して、審査委員からは次のような質問と指摘がなされた。

- ① 看護教育に活かす知見を得るために、看護師ではなくがんサバイバーを研究参加者としたのはなぜか？
- ② この研究ではきわめて質問しにくくかつ聴いていて辛いような内容を含む踏み込んだ聴き取りに成功しているが、これはどのようにして実現したと考えられるか？
- ③ 研究参加者のナラティブを用いたことや SCAT を用いてそれを分析したことは、この研究ではどのような意義を有すると言えか？
- ④ 研究者の立場性はこの研究においてどのように認識されているか？

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

- ⑤ ピアサポートグループの運営に要するコストに触れているが、それは欧米と日本とではどのように異なり、そのことは日本のピアサポートのあり方にどのような影響を与えているか？
- ⑥ 本研究の知見にもとづく看護教育では、患者とのコミュニケーションスキルを獲得させるために具体的にどのようなトレーニングを行うべきだと考えているか？
- ⑦ 本研究の知見にもとづく訓練を受けた看護師が患者に適切に対応できるとしても、医師など他の医療専門職が不適切な対応をしてしまうことはないか？あるとしたら本研究の知見から、それをどのように解決するべきか？
- ⑧ 日本に紹介した日本の研究者が異なるために複数の異なる術語になっているが原語が同じではないかと推測されるものがある。それについては、さらに確認と説明が必要だったのではないか？

博士学位請求者はこれらの質疑に対して具体的かつ適切に応答した。また指摘に対してもよく認識しており、応答は適切なものであった。以上を総合して、本論文は新たな学問的視点と知見を提供するものと認められた。

よって、審査委員は全員一致して、本論文を「博士（教育）」の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。